

安吾が小菅刑務所やドライアイズ工場に「懐かしさ」をおぼえた理由は「彼がそれがもう『生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独』であり、特異でも何でもなく、どんな思想も生活もそこから出発するほかない『ふるさと』であることを発見した」とする論考

しかし、必要なもののみが必要な場所に置かれていくがゆえに、美しいというならば、それは機能主義的な美学者の言葉にすぎない。安吾は「美」について説明してはいない。実際は、安吾は「利根川の風景も、手賀沼も、この刑務所ほど僕の心を惹くことがなかった」と書いており、出発点はまずその刑務所の形観に否応なく心惹かれてしまう彼の資質と経験、そして、それを「なぜだろう」と問う内省にあった。

もし、安吾にしたがって他人がそれを美しいと考えるならば、法隆寺が美しいというのと差違はない。どのみち「直接心に突当り、はらわたに食込んでくるものではない」なく、「一応、何か納得しなければならぬような美しさ」だからである。それなら、法隆寺を美しいという方がまともなので、妙なふうに異説をとなえてもつまらないだけだ。しかし、そういう殺風景な風景を美しいと思う気持には、対象と対応する一つの精神の風景がある。それをにおいて「美」なるものは存在しないのである。

要するに、安吾は逆説を弄しているのではない。また、その種の反語がいま私の胸を打つはずはない。肝心なのは、安吾があるとき不意に小菅刑務所という風景に釘付けになったという事実である。それは、もう「日本文化私観」（昭和十七年）を書いている安吾にとってさえ、定着したものである。

風景の強度は、精神の強度である。「必要」以外の何ものもないような建築を見入っている彼の眼は、「必要」以外の何ものもないという彼の精神の眼にはかならない。そういう心が風景をそのようにみえさせたというのではない。それは美学上の観念論にすぎないので、むしろ対象をはなれてどんな精神があるのかと私はいわねばならない。疑いなく、安吾はそのとき、すなわち昭和十三年頃取手という町にいたころ、「必要」という語にすべてが収斂されてしまうような内的経験のさなかにいた。そのさなかにいては、彼は何一つ語りえなかつた。彼が風景にめぐりあつたのは、そういう失語の時代においてである。

小菅刑務所とドライアイズの工場。安吾がそれらをたんに美しいというより、「懐しい」とか「郷愁」ということばで表現していることに注意すべきである。もちろんそれは彼の実際の故郷と無関係である。だが、「日本文化私観」が書かれたのは、『文学のふるさと』の一年後であり、それらが密接に結びついていることを念頭におくならば、安吾がそれらの風景にみたのが、いわば「文学のふるさと」にほかならないことは明瞭であらう。

……毎日竹藪に雪の降る日々、嵯峨や嵐山の寺々をめぐり、清滝の奥や小倉山の墓地の奥まで当もなく踏みめぐったが、天童寺も大覚寺も何か空虚な冷めたさをむしろ不快に思ったばかりで、一向に記憶に残らぬ。

茫洋たる大海の孤独さや、沙漠の孤独さ、大森林や平原の孤独さに就て考えるとき、林泉の孤独さなどというものが、いかにヒネクれてみたところで、タカが知れていることを思い知らざるを得ない。  
(「日本文化私観」)

「日本文化私観」には、実は、京都に滞在して『吹雪物語』を書きながら悪戦苦闘していた時期に見た風景と、そこから引きあげて利根川べりの町取手やその他の町を放浪している間に出会った風景の二つがあるだけだ。京都や奈良の建築に対する彼の嫌悪には、その当時の混乱のなかの自己への嫌悪が投影されており、また小菅刑務所やドライアイズの工場などへの「郷愁」には、痛苦にみちた自己発見が投影されているといっても過言ではない。「日本文化私観」はきわめて、私的な。エッセイであるが、それをそう感じさせないのは、彼の特異な資質や感受性がすでに思想として明確に対象化されているからだ。

『石の思い』のなかに、安吾が、北原武夫に風景のよい温泉はないかと尋ねられて、新鹿沢温泉を教えたところ、北原が憤慨して帰ってきたという話がある。それは「浅間高原にあり、ただ広茫たる涯のない草原で、樹木の影もないところ」だったからである。ところが、安吾は、「北原があまり本気にその風景の単調さを憎んでいるので、そのとき私は始めてびびくり気がついて、私の好む風景に一般性がないことを疑ぐりだしたのである」。

もしそうだとすれば、小菅刑務所やドライアイズの工場が気に入る彼の感受性は一般性をもたないということになり、そこから出立する彼の論理も一般性をもたないことになるであらう。むしろそれが特異感覚の誇示にとどまっているかぎり、そうであるほかはない。しかし、それらの単調で殺風景な形観に「懐しさ」をおぼえ、なぜそんなのかを考えていったはてに、彼はそれがもう「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」であり、特異でも何でもなく、どんな思想も生活もそこから出発するほかない「ふるさと」であることを発見したので、これはロマン派の回帰する「ふるさと」でもなく、「故郷喪失」でもない。

安吾は「ふるさと」を発見する。だが、それは一切の、人間的、な親和性を寄せつけぬ、抽象的で無機的な世界である。彼はそこに根をおろす。「根」からいわば、突き放された。かたちで根をおろす。安吾が安吾として、「確信的な何か」をもってあらわれてくるのはそこからだが、その過程にはさらに興味深い問題がひそんでいる。

(「文芸読本 坂口安吾」河出書房新社 一九七八年、初出「文芸」一九七五年五月・七月号)